

が3例で認められたが、生命にかかわるような重篤な副作用は認めなかった。副作用のため、2例で投与間隔の継続的な延長を必要とした。現在も全例がPS0である。中止例はなかった。症例数が少なく、また経過観察期間が短いため、奏功率の検討はできないが、3例で効果判定を行った。多発肝転移症例に1st lineでFOLFOXと併用(5 mg/kg投与)した症例では、2.3ヶ月間のSDだがRECISTで肝転移の20%の縮小を認めた。両肺、多発肝転移症例に1st lineでFOLFOXと併用(5 mg/kg)した症例で、7.0ヶ月間SDを保っていた。また両側肺転移、胸膜播種症例で3rd lineとしてFOLFOXと併用(10m/kg)した症例で、7.5ヶ月間のSDであった。

【結語】当科のAvastin投与に関しては生命にかかわるような重篤な有害事象は認められなかった。SD3例であったが、奏功率に関しては今後の検討を要する。

## 20 大腸癌化学療法の個別化とチーム医療

宗岡 克樹・白井 良夫\*・佐々木正貴  
朝倉 俊成\*\*・神田 循吉\*\*  
若林 広行\*\*・畠山 勝義\*  
新潟医療センター病院外科  
新潟大学大学院消化器・一般外科学  
分野\*  
新潟薬科大学薬学部臨床薬剤治療学  
研究室\*\*

【目的】大腸癌の化学療法を個別化する際にチーム医療がいかに機能したかを検証する。

【方法】当院では癌化学療法サポートチーム(CST)が活動している。対象は2001年10月より2008年2月までの間にPMC療法(週1回5-FU 600mg/m<sup>2</sup>を午前9時から24時間かけて持続静注し、UFT400mg/day 週5日間経口投与を併用)あるいはFOLFOX療法を施行した切除不能・再発大腸癌30例であった。新潟薬科大学での血清5-FUの濃度測定により、薬剤の至適投与量を決定し、外来へ移行した。CSTが導入された2004年以前と以後で、予後に影響を及ぼした因子について検討した。

【結果】PMC療法のMSTは1st lineで19M、2nd lineで14Mであった。チーム医療により、患者ごとの副作用の早期発見やニーズの把握が可能となり、より個別的な対応(レジメンの変更および薬剤投与量の調整、栄養指導や医療費の自己負担額の通知)が可能となった。チーム医療によってMSTが35ヶ月と導入前の14ヶ月と比べて有意(P=0.0058)に延長していた。多変量解析では、PMC治療期間(p=0.0002)とFOLFOX療法の導入(p=0.0148)が有意に予後に影響していた。

【結論】大腸癌化学療法を個別化するうえで、院内でのCST、院外での新潟薬科大学とのチーム医療は有効であった。

## 21 下部直腸扁平上皮癌・肛門管癌に対する化学放射線療法

船越 和博・佐々木俊哉・佐藤 俊大  
本山 展隆・加藤 俊幸・瀧井 康公\*  
松本 康男\*\*・杉田 公\*\*  
太田 玉紀\*\*\*

県立がんセンター新潟病院内科  
同 外科\*  
同 放射線科\*\*  
同 病理\*\*\*

【目的】リンパ節転移をともなう下部直腸扁平上皮癌・肛門管癌に対する化学放射線療法(CRT)の治療成績と課題を報告する。

【方法】対象は39-60歳(平均51.7歳)の女性3例。3例ともRb-Pの進行癌で、stage III b 1例、IV 2例であった。50.4-60Gyの体外照射およびlow dose FP療法(5-FU 250mg/m<sup>2</sup>, CDDP 3 mg/m<sup>2</sup>)を併用した。

【結果】3例とも原発巣はCR、2例はリンパ節転移も消失し、CR 2例、PR 1例であった。有害事象はGrade IIの白血球・血小板低下、Grade IIの下痢・肛門痛であったが、許容範囲内であった。しかしCRの1例に再発を認めた。

【結論】直腸扁平上皮癌・肛門管癌はCRTの感受性が高く、肛門機能温存可能でQOLの点からも有用であり、CRTが第一選択の治療法となり得

る。しかし高度リンパ節転移症例が多く、遺残再発病変に対する追加化学療法が今後の課題である。

## II. 特 別 講 演

### 直腸癌に対する化学放射線療法と外来化学療法

帝京大学医学部外科 教授

渡 邊 聡 明

### 第 9 回新潟胆膵研究会

日 時 平成 20 年 9 月 27 日 (土)  
午後 2 時～7 時 5 分  
会 場 万代シルバーホテル  
5 階 万代の間

#### Session I 『検査・診断』

#### 1 胆管癌の表層拡大進展の存在診断に経口胆道鏡検査が有用であった 1 例

佐藤 良平・若井 俊文・塩路 和彦\*  
金子 和弘・白井 良夫・井上 真\*\*  
味岡 洋一\*\*・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野  
同 消化器内科学分野\*  
同 分子・診断病理学分野\*\*

症例は 75 歳, 男性. 上部胆管癌の疑いで当院紹介受診した. 高齢者であることを考慮して肝外胆管切除術を立案していたが, 直接胆道造影で左肝内胆管壁に“毛羽立ち状”の壁不整像を認め, 表

層拡大進展の存在が疑われた. 経口胆道鏡検査を施行し, 左肝内胆管に発赤調で乳頭状ないしは微細顆粒状の粘膜を認め, 表層拡大進展の存在を確認できたため, 肝左葉切除術および肝外胆管切除術を施行し癌遺残のない切除が実施可能であった. 直接胆道造影で胆管壁に“毛羽立ち状”あるいは“鋸歯状”の壁不整像を認めた場合には, 表層拡大進展の存在を疑う必要がある. 表層拡大進展の存在診断には経口胆道鏡検査は有用であり, 適切な術式を決定する上で考慮すべき術前検査法の 1 つである.

#### 2 術後症例に対する ERCP の経験

有賀 論生・塩路 和彦・富樫 忠之  
河内 裕介・横山 純二・青柳 豊  
成澤林太郎\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野  
新潟大学医歯学総合病院光学医療  
診療部\*

近年, 術後症例に対する ERCP の必要性が増加しており, 当科での現状ならびに問題点を retro-spective に検討した. 対象は 2004 年 1 月から 2008 年 7 月までに施行した 27 症例 46 回とした. 術式は B-I 再建 10 例, B-II 再建 6 例, 胃全摘 2 例, 膵頭切除後 3 例, 胆管空腸吻合 4 例, 空腸間置 2 例であった. 使用したスコープは JF240 に加え, XK240, SIF-Q260, PCF-240I など多岐にわたっていた. 主乳頭あるいは胆管吻合部への到達率は 93 % と比較的良好であったが, スコープ挿入からの平均到達時間が 24.1 分と時間がかかり, 特に胆管空腸吻合症例では平均到達時間が 1 時間以上であった. スコープ変更後に到達に成功した症例もあり, 状況に応じてスコープを選択することが重要と考えられた.

手技完遂率は全体で 74 % であったが, 完遂率は術式よりも目的手技の難易度によると思われた. これまでの経験では穿孔などの重篤な偶発症は発生せず, 術後症例においても比較的安全に ERCP を施行できると考えられた.